

vol.1 / 2021.01

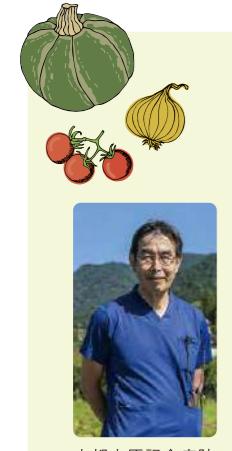


特集 グリーン・ファーム・リハビリテーション®の挑戦

特集 グリーン・ファーム・リハビリテーション®の挑戦

農業が生み出すリハビリテーションのチカラ

患者様の社会復帰に向けた回復期リハビリテーション(以下、リハビリ)を担う
京都大原記念病院で、約2,000m²の農園をフィールドに、農業をリハビリプログラム
の一環として取り組むグリーン・ファーム・リハビリテーション®をご紹介します。



京都大原記念病院
院長
垣田 清人

目的が明確になり 脳を活性化させる

農作業には多くのリハビリ要素が含まれています。不安定な農地を歩く、行程を理解し段取り良く活動する、中腰など不安定な姿勢を保つ、手や指先を使う。これらを含むタネまき、苗植え、収穫など農作業は行動目標が明確です。患者様が意欲的に参加され、脳が活性化、結果として身体的・心理的な効果につながることを期待しています。



10月29日に実施したサツマイモ掘りの時に聞かれた実際の声



厳しい季節は屋内活動
夏・赤シソを摘み取る患者様

地元農家から苗を譲り受けたことをきっかけに始めた農業。リハビリで使用する周回路沿いの土地で有志の職員たちが集い農園づくりに挑戦する姿が、患者様の目に触れるようになると、「やってみたい」との声が聞こえるようになりました。とはいっても、職員の誰ひとりとして農業に関する専門知識を持ち合わせておらず、自然の厳しさを目の当たりにし、また多くの課題にも直面しました。解決したのはタキイ種苗との出会いです。技術指導を受けるようになると光景は一変しました。安定して活動ができる農園に発展し、リハビリプログラムの一環として実施することが可能になりました。四季を感じ、野菜や土に触れ、意欲的に参加する患者様の姿が見られるようになりました。

「やってみたい」の声を後押しに

1 突き付けられた自己流の限界

きっかけは、地産地消を推進してきた管理栄養士たちが地元農家に苗を貰ったことでした。最初は有志の職員で土を耕すことから活動は始まりました。頼りは家庭菜園経験の勘だけ。地道に取り組み、翌年にはピーマンを収穫できたものの、農園全体の管理は現実的に困難でした。気を抜けば雑草が生い茂り、雨が降ればしばらく立ち入れなくなる。いずれは農業をリハビリに活かしたいと思いながらも、自己流の取り組みの限界を突きつけられました。



3 リハビリ訓練場としての農園づくり

自分で歩ける方、車いすの方、患者様の状態は様々です。幅広く、安全に参加いただけるように議論を重ね「通路幅」「畠の高さ」「気候(酷暑)」などに配慮することで、参加者の幅を大きく広げることができました。

- 画像 [1] 幅は1.2~1.5m。大人2人が横並びで無理なく移動でき、車いすもその場で切り返せる。
- 画像 [2] 畠を高くすることで水はけが改善した。溝をなくすことができ、車いすで畠に近づけるようになった。
- 画像 [3] 夏は熱中症計を携帯。キュウリなどでできるグリーン・トンネルも避暑を兼ねて有効活用。



手探りで始まったオリジナルの農園づくり

様々な状態の患者様が安全に、安定して活動できる環境には農業の常識には当てはまらないこともあります。「医療(京都大原記念病院)」と「農業(タキイ種苗)」の視点で議論を重ね、工夫を施してきたのがオリジナルの農園です。その歩みの一端に触れます。

2 農園の光景は一変

2014年11月、府内のシンポジウムで、当グループの管理栄養士とタキイ種苗研究員が出会いました。農業をリハビリ医療に活かそうとする試みに、機能性野菜を通じた社会貢献を目指すタキイ種苗が共感。翌年から指導員の技術指導が始まると、農園の光景は一変しました。



タキイ種苗指導員(写真右から2人目)の指導を受ける同院スタッフ(写真左から1人目)



タキイ研修農場の視察に訪れた垣田清人院長ら



2019年7月研修会に参加したグループスタッフと地元農家ら

{ 基本的な実施フロー }

医師の許可／処方箋

活動時間 約20分／回

休憩／水分補給

回復期リハビリ病棟で実施する
1日最大3時間のリハビリプログラムの一環で実施



医師を中心に職種の垣根を越えて連携リハビリ治療として取り組む

グリーン・ファーム・リハビリテーション[®]は、患者様の退院後の目標に向けて必要と考える場合に実施します。主治医が患者様の状態と農作業内容を照らし合わせ患者様の希望に適し、また安全に参加できると判断された場合に指示(处方)が出ます。

4 リハビリ医療としての農業

スタッフは同社研究農場(滋賀県湖南市)での研修会に参加して、知識習得に努めています。近年、大原の若手農家と一緒に参加するなど地域交流の新しい形になりつつあります。

スタッフは同社研究農場(滋賀県湖南市)での研修会に参加して、知識習得に努めています。近年、大原の若手農家と一緒に参加するなど地域交流の新しい形になりつつあります。



第二日赤 症例報告会を初めてリモートで開催

京都第二赤十字病院と京都大原記念病院グループの症例報告会が10月28日、第二日赤とグループ3会場をウェブで結んで開催され、全体で約120人が参加しました。会は、発症後の急性期の治療に当たる第二日赤と、その後のリハビリを担う同グループ(京都大原記念病院、京都近衛リハビリテーション病院、御所南リハビリテーションクリニック)が連携して診た患者様の経過について理解を深める狙いで毎年開いています。今年は密集による新型コロナウイルス感染のリスクを避けるためリモート形式の開催となりました。



農業のリハビリ医療への有効性検証へ連携協定

11月1日、京都大原記念病院グループは、京都府立医科大学、及びタキイ種苗と「グリーン・ファーム・リハビリテーション®」に関する連携協定書を締結しました。協定は患者様の社会復帰に向けた回復期リハビリを担う同院で、約2,000m²の農園をフィールドに、農業をリハビリプログラムの一環として取り組むグリーン・ファーム・リハビリテーション®の有効性を検証するにあたり、三者が相互に協力し、成果を共有することが目的です。農業がリハビリ医療のツールとして有効である科学的根拠を示すことを目指します。



介護の日研修、心動く149作品が集う

11月11日の「介護の日」に関連し、グループでは毎年、改めて理解を深めるとともに自身の仕事を振り返る機会とする目的で研修会を開催しています。集合研修が主でしたが、新型コロナウイルス感染症対策の観点から今年度は「介護やケアの仕事を通じて感じた心温まるエピソード」を募りました。投稿者の想いや心が動いた瞬間が込められた149作品からは職員投票等を経て5点が入賞。入賞作品はグループウェブサイトで、インタビューとともに公開する予定です。

脳卒中啓発に多職種協働ダンスで参加

世界脳卒中データとされる10月29日を起点に、世界各国ではさまざまな脳卒中予防のための啓発活動が実施されています。日本ではこの一環で、日本脳卒中協会が「ダンスで楽しく脳卒中を予防しよう!」というキャンペーンを展開しており、京都大原記念病院のスタッフが参加。振り付けは入職2年目~3年目の若手セラピストが企画し、垣田清人院長をはじめとする医師、看護師、セラピスト、介護職、医療ソーシャルワーカーほか様々な職種が参加しました。

農業がリハビリ医療のツールとして有効である 科学的根拠を示すことを目指す

グリーン・ファーム・リハビリテーション®は、京都大原記念病院グループ、京都府立医科大学、タキイ種苗の「共同研究事業」という側面も併せ持ちます。2020年11月1日、三者間で「グリーン・ファーム・リハビリテーション®に関する連携協定書」を締結しました。農作業が心身の健康に役立つと経験的に知られている一方で、地理的環境や変動する「患者の障害状況」「天気や季節」「農作業内容」を的確に捉える難しさから根拠に乏しく、回復期リハビリ病棟での実践報告も少ない状況です。協定を礎に三者は相互に協力し、中長期的視点で農業がリハビリ医療のツールとして有効である科学的根拠を示すことを目指します。

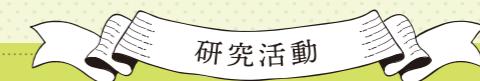


協定の締結後、三者の代表者が集い意見を交わしました



三者が有機的に連携を進める

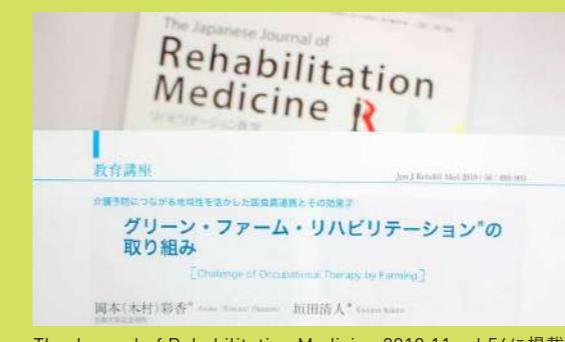
協定は、総括を京都大原記念病院グループ、研究指導を京都府立医科大学大学院医学研究科 山脇 正永 教授、同 水野 敏樹 教授、農業指導をタキイ種苗とし、研究、および農園運営に関することなどについて三者が相互に協力し、成果を共有していくことを目的としています。



積極的に発信することで得られる様々な視点

京都大原記念病院では、京都府立医科大学の指導のもとで医師、セラピストを中心に研究活動を進め、学術集会等での報告や学術誌への寄稿も積極的に取り組んできました。発信することで生じる様々な議論を通じ、取り組みを発展させていくことが狙いです。これまでの報告は脳卒中の患者様が身体機能、前頭葉機能などに改善が見られた事例を取り上げてきました。発信による様々な意見から得るものも多いものの、

いずれも1日最大3時間実施するリハビリプログラムの一環として行なうなかの傾向であり、グリーン・ファーム・リハビリテーション®のみの効果と捉えることはできていないのが課題となっています。断続的に取り組みを知った医療機関や業界団体、地域団体などからの問い合わせを受け講演などの機会も得ています。今後も協定締結を機会に、課題解消に向けて踏み込んだ検証を進めていく方針です。



The Journal of Rehabilitation Medicine 2019.11 vol.56に掲載



訓練室前に掲示する学会で発表したポスター



京都大原記念病院グループ
KYOTO OHARA HUMAN CARE NETWORK

orinas
オリナス
について

患者様、ご利用者、ご家族の心に寄り添い不安を取り除くために、職種や組織、医療や介護の枠にとらわれず、人や地域と織りなすつながりのなかで生まれる様々な場面を季節ごとに紹介します。

お問い合わせ

TEL／075-744-3121(代表)

FAX／075-744-3126

MAIL／kouhou@kyotoohara-gr.jp



WEB



Facebook